松蔭 校長室だより

2025 年 6月 2日 発行

―校長から保護者の皆様へのメッセージですー

松蔭中学校・松蔭高等学校

校長 浅井宣光

若者を歩むべき道のはじめに教育せよ。年老いてもそこからそれることがないであろう。（箴言 22:6）

読書の楽しみを伝える

「本好き、読書好きの子供にとって松蔭の図書館は魅力的に映るようで、入学後も『居場所』にしている生徒がいます。卒業生の一人は、多い時には日に 5 冊も借りていました。定期考査前には親から『貸出本禁止令』が出ていたほどでした。本好き、読書好きの生徒の印象には共通点があります。それは『生きるペース』を身につけていることです。『生きるペース』とはいかにも大げさですが、物事についての自分なりの対処を、自分のペースで着実にこなすタイプだということです。自ら思考する力を持っている、とも言えるでしょうか。現在のネット社会では、中高生であっても、スマホからおびただしい量の情報を否応なく浴び続けている実状があります。デジタルの文字や個人のし好に合わせた似た動画の繰り返しは、個人の情報処理力をたやすくオーバーしています。しかし、書物の場合は、途中で立ち止まることができます。活字を追う作業の中断は自分の意思次第です。マイペースで情報処理ができます。思考を自分のペースでコントロールできるのです。活字から得る心象をさらに大きく創造して、自分なりの世界を思い浮かべることもできるのです。立ち止まるだけでなく、ずっと前のページに戻り、その時の思考と感情を再現することも容易です。このような『習慣』が自然に身についている、つきかけている。本好き、読書好きの子供の特徴だと思います」

中学のユニークな特色入試として「課題図書プレゼン入試」を実施していますが、この入試向けの説明会で私が保護者の方々に話している内容です。入試では、指定された課題図書のなかから好きな本を選び、ポスターを用意してその本の魅力や関連する社会問題についてプレゼンをします。面接官との Q&A セッションもあり、その内容は観点別に点数化され合否が決まります。この入試方式のねらいは、読書好きの子どもに入学してもらい、10万冊を超える蔵書数を誇る図書館を利用して知的探求心を精一杯育成しよう。プレゼンも経験して将来の探究学習の取り組みにも繋げようというものです。

「実は掃除当番で図書館に入っただけで、本を借りたことはありません」 かつてある高校生が告白してくれました。読書をすれば、語彙力や読解力が身につくし想像力や発想力も豊かになるよ、と大人は説きます。進路や成績とリンクさせれば、モチベーションアップにつながるだろうと「現実的な打算」で説得しても、子どもは大人の思い通り、願いとおりには動きません。読書の楽しみをどのように伝えたらよいのでしょうか。

私事で恐縮ですが、中米のメキシコとグアテマラを旅行したことがあります。グアテマラの首都の郊外にあるアンティグアという古都は当時、一番安くスペイン語を学べる町として世界中からバックパッカーが集まっていました。いい機会だと、現地入りすると早速ツーリストインフォメーションで紹介してもらったスペイン語学校に入りました。2 週間の短期集中レッスンは、1日7時間のマンツーマン授業とホームステイのパッケージで、当時の日本円で数万円でした。この格安「短期語学留学」経験から、タイトルに惹かれて女優片桐はいりさんのエッセイ「グアテマラの弟」を読みました。アンティグアに暮らす弟を彼女が訪ねた際の旅行記ですが、現地人と結婚しスペイン語学校を経営する、長年没交渉であった弟との再開と異文化との様々な出逢いが軽妙なタッチで描かれています。思わず顔をほころばせながら、数十年前、実際に歩いた街並みとスクールのスペイン語の先生の姿、ホストマザーとの拙いスペイン語とのやり取りを思い出しました。ドアが閉まらない満員の乗り合いバスに揺られたことや、同じホームステイ先のドイツ人と立ち寄った地元感溢れるバー。何十年も記憶に埋もれていた光景が蘇えり、「読書が止まらない」感覚を久しぶりに覚えました。実体験と書物の中身が重なることは、読書の魅力のひとつだとあらためて思いました。図書館では、イベントごとに特集コーナーが設置してあります。修学旅行にそなえてシンガポールと沖縄コーナーが、人権学習でジェンダーに関する講演会がある時には LGBTQ コーナーに関連図書が並びます。韓国コーナーは姉妹校との交流準備です。様々な学校プログラムを終えたあとにも本を手に取り、「止まらない」経験をすれば読書の魅力をまたひとつを感じてもらえるのではないかと思いました。